

7)昭和62年度の防除上特に注意を要する病害虫

中央農業試験場病虫部

この成績は昭和61年に各農試、病害虫防除所及び農業改良普及所が実施した予察事業ならびに試験研究の結果から主要害虫の発生状況と新生病害虫を概括し、さらに侵入害虫であるイネミズゾウムシの発生経過について取りまとめたものである。

昭和61年に多発した主要病害虫

作目	やや多 ~ 多発性した病害虫
水稻	葉しょう褐変病、縞葉枯病、褐条病、セジロウンカ、イネクビボソハムシ、イネミギワバエ
小麦	うどんこ病
豆類	小豆の落葉病、小豆のアブラムシ類、菜豆の菌核病
馬鈴しょ	葉巻病、アブラムシ類
てん菜	苗立枯病
リンゴ	モニリア病、ハマキムシ類、ネズミ類
野菜類	タマネギの黒穂病、ネギアザミウマ、ニンジンの黒葉枯病、ダイコンの軟腐病、ハクサイのべと病、トマトの灰色かび病と葉かび病、ナスのうどんこ病、キュウリの菌核病と灰色かび病
牧草	(イネ科)雪腐病、(マメ科)アルファルファのバーティシリウム萎ちよう病

昭和61年に新たに発生または命名された病害虫

高級菜豆の根腐症：Fusarium oxysporum,根部の褐変・腐敗と下位葉からの葉の黄化・萎ちよう。

馬鈴しょの緋色腐敗病：Phytophthora erythroseptica,茎および塊茎の腐敗。

馬鈴しょの半身萎ちよう病：Verticillium nigrescens,茎葉の黄化と萎ちよう。

ブドウの環紋葉枯病：Cristulariella pyramidalis,葉の輪紋状病斑と落葉。

ミツバのてんぐす病：マイコプラズマ様微生物、黄化小型葉の叢生。

ステビアの斑点病：Septorea steviae,葉の褐色斑点。

トウモロコシの立枯病：Penicillium sp.,中茎のずい部と茎盤の褐色腐敗による株の立枯。

トウモロコシの茎腐症：Pythium graminicolum,黄熟期の株の萎ちよう。

エンバクの紋枯病：Rhizoctonia solani,葉鞘の大型だ円形の病斑。

水稻のイネミズゾウムシ：Lissorhoptus oryzophilus,成虫は葉をカスリ状に食害し、幼虫は根部を食害する。

キュウリ、メロンのサカモリコイタダニ：Oribatus sakamorii,食害による子葉と本葉の小孔。

ハウレンソウのコナダニの一種：Mycetoglyphus fungivorus,食害による芯葉の小孔と展開葉の楠葉。

キュウリのケナガコナダニの一種：Tyrophagus similis,食害により展開葉の縮葉・奇形と小孔。

アスパラガスのジュウシホシクビナガハムシ：Crioceris quatuordecimpunctata,花と種子を食害。

チモシーのイシカリヨトウ：Apamea oblonga,幼虫が茎葉の基部を食害。

イネミズゾウムシの発生について

(1)昭和61年6月11日に渡島支庁管内大野町で北海道で初めて発見された本虫はその後の調査で後志、上川及び胆振支庁管内などで広範囲に発生が認められ、発生面積は62.9haに及んでいる。

(2)北海道における各態の発生経過はつぎのように推定される。

- 1)越冬後成虫： 水田への侵入は田植後間もない5月末頃から始まり、侵入盛期は6月中旬～下旬と推定される。
- 2)幼虫： 6月下旬から認められ、寄生盛期は7月下旬で9月上旬に終息する。
- 3)土まゆ(蛹)： 7月下旬から認められ、その盛期は8月下旬頃と推定される。
- 4)新成虫： 出現は8月中ば頃から始まり、盛期はおおよそ9月上旬で、発生後は順次水田に隣接する畦畔などに移動し、越冬すると考えられる。

(3)北海道における発生定着可能地域

有効積算温度から年間発生回数を推定すると渡島、桧山、胆振、後志、石狩、空知及び上川地方など、広範囲の地域で1世代を経過することが可能である。



図1.イネミズゾウムシの発生市町村及び発生面積

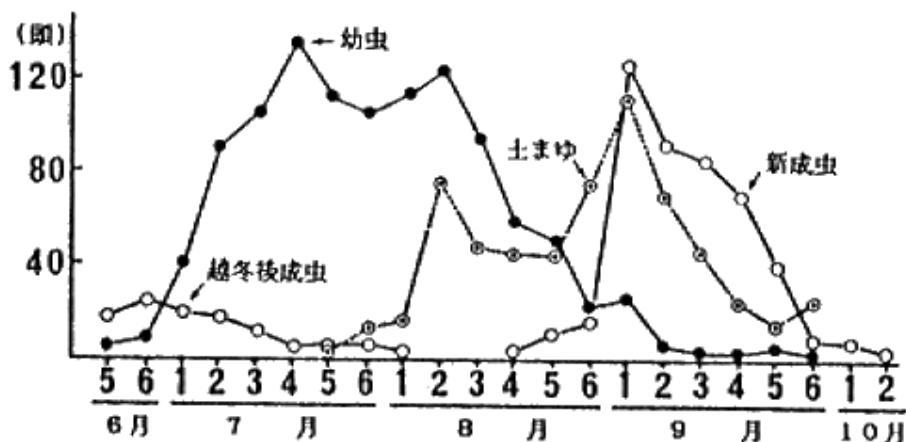


図2.イネミズゾウムシ各態の発生消長(大野)

